## 四十九　小野篁広才の事　（宇治拾遺物語巻三　第一七話）

今は昔、今は昔、小野篁といふ人おはしけり。

嵯峨の御門の御時に、内裏に札を立てたりけるに、「無悪善」*と書きたりけり。御門、篁に、「読め」と仰せられたりければ、「読みは読み候（さぶら）ひなん。されど、恐れにて候へば、え申し候はじ」と奏しければ、「ただ申せ」とたびたび仰せられければ、「『さがなくてよからん』と申して候ふぞ。されば君を呪ひ参らせてなり」と申しければ、「これは、をのれはなちては、誰か書かん」と仰せられければ、「さればこそ、『申し候はじ』とは申して候ひつれ」と申すに、御門、「さて、なにも書きたらんものは読みてんや」と仰せられければ、「何にても読み候ひなん」と申しければ、片仮名の子もじ*を十二書かせ給ひて、「読め」と仰せられければ、

「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし」

と読みたりければ、御門、ほほゑませ給ひて、ことなくてやみにけり。

---

* 訓読みは意味読みなので、悪を「さが」と無理に読むことができないわけではない。
* カタカナに「子」の文字があったらしいが、文意は漢字でよい気もする。